

13. ^{198}Au -コロイドを用いた肝癌の術前肝機能検査について

水川 婦一郎 玉井 豊理 田辺 正忠
佐藤 功 山本 道夫 (岡山大・放)

^{198}Au -コロイドによる肝シンチグラムに格子状関心領域を設定し、肝容積およびk値を算出した。肝容積測定法の精度を検討し、 $1,715\text{ cm}^3$ の肝臓ファントムの測定値は $1,610 \pm 170\text{ cm}^3$ であった。20症例の肝容積をシンチグラムとCTスキャンで測定し、 $r=0.87$ の相関を得た。

肝切除術前患者14例(肝癌11例)の残存予定肝容積率に患者k値/正常k値(0.18)を乗じた値を算出し、肝切除限界決定の指標としての有用性を検討したところ、術後死亡の2例は比較的低い値であったが、より低い値で予後良好なものもあった。また、術後3週間目のシンチグラムより肝再生率を求めたところ、k値が低いほど再生率が低い傾向が見られた。

14. 肝胆道系シンチグラフィについて

小林 久人 横山 敬 小林 盛子
江口 誠一 佐々井一彦 松本 常男
中西 敬 (山口大・放)

今回われわれは、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HIDA, E-HIDA, PB-IDAによる肝胆道系シンチグラフィ54例について、その有用性を検討した。正常例の検討では、PB-IDAで肝からの排泄が遅延し、HIDAで腎の描出が著明であった。各種肝胆道疾患の診断率は、HIDA 64%, E-HIDA 91%, PB-IDA 82%であった。HIDAではビリルビン値が 7 mg/dl 以上では完全閉塞例と高度肝細胞障害例との鑑別が不能であったが、PB-IDAではビリルビン値が12.9, E-HIDAではビリルビン値が13.5の症例で正しく診断できた。肝内胆管と胆嚢の描出の有無に注目することは狭窄性疾患の診断に有効であったが、PB-IDAでは肝内胆管の描出が不良であった。また、左肝内胆管は正常例で67%に認められ、左右肝内胆管を同時に認める時のみ陽性所見とした。

15. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -EHIDAによるfunctional hepatomaの3例

三谷 健 長島 秀夫 (岡山大・1内)

昨年の本学会で、肝癌組織に胆道造影剤が取り込まれる、いわゆるfunctional hepatomaの1例を報告したが、今回さらに剖検まで完了した2例を追加し3例をまとめて報告した。第1例は昨年と同じ。第2例は72歳女性。AFP 17.0 ng/ml , CEA 1.89 ng/ml , $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -S colloidにて肝右葉が完全にdefect様に見え、その部に ^{67}Ga citrateの強い集積を認める。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -EHIDA scanにてtumor部に取り込みを認めた。剖検にてmacroではgreen hepatoma。Macroにてbile pigment richなwell differentiated hepatocellular carcinoma。第3例は59歳男性。診断より死亡まで約3年10か月のslow growing hepatoma。AFP 8.0 ng/ml , CEA 1.98 ng/ml , 肝右葉中部から左葉全体がSOL。その部に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -EHIDAの集積像を認める。 ^{67}Ga -citrate, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -angio, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -EHIDAのhot部位が一致したのが興味深かった。剖検所見は第2例とほぼ同じ。3例ともEHIDA clearanceは癌部は非癌部に比べ、摂取率も排泄率も遅れていた。Hepatoma診断において $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -biliary scanの上記所見はsensitivityは低いが、specificityは高いゆえに有用な面があることが分った。

16. ニューロテンシンのラジオイムノアッセイ：測定方法と臨床成績

松村 光博 大野ますみ 福田 直子
森 博愛 (徳島大・2内)
斎藤 史郎 (同・検査部)

Neurotensinのヒトにおける生理的役割を明らかにする目的で、radioimmunoassayによる測定法を確立した。抗体はglutaraldehyde法により合成neurotensinと牛血清アルブミンを結合させ、complete adjuvantと混じて家兎を免疫して作成し、得られた抗体はbrain-gut peptidesと交差性を示さず、neurotensinに対し高い特異性を示した。 ^{125}I によるneurotensinの標識はクロラミンT法により行い、freeとboundの分離には二抗体法を用いた。RIAの条件について検討した結果、標識ホルモンの遅延添加で感度は最も良好であり、 $1\text{ pg/tube} \sim 32\text{ pg/tube}$ の間で用量反応相関性が認められた。Intraassay